

岩手・郷土芸能 躍動の源泉へ

記録映画「鹿踊りだちゃい」

京在住・坂下清監督



映画「鹿踊りだちゃい」より



岩手県宮古市の郷土芸能「川内鹿踊り」の起源に迫るドキュメンタリー「鹿踊りだちゃい」が大阪市淀川区十三本町のシアターセブンで公開されている。宮古市出身の坂下清監督(35)「京都市伏見区」が、郷里に近い川内地域を舞台に取り上げた。鹿踊りは岩手県のほか宮城県にも伝わり、宮沢賢治の作品にも何度か登場する。タイトルは、賢治の詩「高原」の一節だ。鹿の頭部を模した鹿頭をかぶり、さらさらを背負った踊り手が太鼓と笛の音に合わせて躍動する鹿踊り。盆の時期、独特の節回しの歌

「闇夜にたいまつを囲んで踊る姿に、江戸時代の人たちの思いを重ね合わせた」と語る坂下監督(京都市下京区)

を歌いながら家々を回り、死者を供養する。岩手県内に100以上ある鹿踊り保存団体のなかで、川内地域を選んだ理由について監督は「踊りにまつわる古文書が残る地域は少なく、川内の鹿踊りは『巻物』と呼ばれる文書とともに伝えられてきた点で貴重」と話す。

巻物が書かれたのは、江戸中期の1781(天明元年)。詳しい由来は書かれていなかったが「書かれた年代が重要」という。75〜82年までの7年間は「七年飢死」と呼ばれる凶作が続き、83年には天明の大飢饉が起る。苦しい時代、人々はどんな思いを鹿踊りに託したのか。監督は取材を通して「死者を弔うだけでなく、絶望の中で生きている人たちが何か夢中になれるものが必要だったのでは」とみる。

ただ、その考えは作品中には出てこない。人々は巻物をあくまで「神体のようにまつり、親兄弟から習った歌を次世代に伝えようと歌い、踊る。その無心さこそが、数百年を経て今も続く営みの源泉なのだと思う。

宮古市というと東日本大震災に結びつけられることが多い。「地域に残る豊かな文化も知ってもらいたい」と話す。

26日まで毎日午後0時15分から上映。同館806(4862)7733。

(太田敦子)

盆の時期に死者供養 「飢饉の時代 生きた人々の思い感じ」